

第2回加茂駅周辺まちなかエリアプラットフォーム準備協議会 議事要旨

- 1 日時：2023年10月30日（水）午後2時から4時
- 2 場所：加茂市役所3階 301・302会議室
- 3 出席者（敬称略）

委員：木戸 信輔（加茂商工会議所 会頭）
田邊 良夫（加茂市商店街協同組合 理事長）
萩野 正和（株式会社 conel 代表取締役）
松井 大輔（新潟工学部工学科 准教授）
加藤 はと子（全国「道の駅」女性駅長会 会長）
中丸 精一（第四北越銀行 加茂支店 支店長）
杵鞭 久（加茂信用金庫 理事長）
小林 一隆（NST新潟総合テレビ 情報制作本部 デジタルマーケティング部 部長）
市川 恭嗣（加茂市 CSO）
渋谷 美浩（新潟県三条地域振興局 局長）
川崎 大一郎（加茂青年会議所 理事長）
横山 泰（新潟経営大学 地域活性化研究所 所長）
若月 守（NTT東日本 新潟支店 副支店長）

事務局：政策推進室、(株)オリエンタルコンサルタンツ

4 議事

(1) 開会

(2) 資料等の説明

1) ワーキンググループでの活動報告と未来ビジョンの策定に向けて

事務局から配布資料(3)「ワーキンググループでの活動報告と未来ビジョンの策定に向けて」を説明した後、委員より補足の説明があった。

【委員】エリアプラットフォームについて、国交省の定義で重要なことは、これまで様々な協議会が出現しまちづくり活動を行ってきたが、団体組織ではなく「場」であることが明言されたこと。

「プラットフォーム」の意味は同じ方向性を持っている人々が集まる場所であり、その方向性を議論した先にあるものが本日議論するビジョンである。

次にこのプラットフォームがどのように機能していくか述べたい。まちづくりのビジョンができた時に目指すべき最終形は、まちに色々なプレイヤーが増え、事業が展開され、まちが変わっていく状況を生み出すことである。

まちづくりでは考えなければならないことが沢山ある。そのため加茂市全体で考えるのではなく、どこかで区切り、そのなかでどのようにまちづくりをすべきか考えるために「エリア」を固定する必要がある。

エリアを決めることで、活動しているエリアとそうでないエリアとの差が生まれ、当該エリアの特色や課題がより分かりやすくなる。また、エリアに応じた役割も分かりやすくなる。

一方、エリアを区切って考えた時に、現在の特色のみを捉えた取組に着手するというのは少し安直すぎる。これでは現在の状況しか考えていない。未来ビジョンをつくるにあたり、未来のまちをどのようにしたいか、種々ある解決すべき課題の内、何に着手するか調整する役割がエリアプラットフォームである。

地域課題として消費や雇用、健康寿命、孤独・孤立などあるが、各課題に対してエリアプラットフォーム自身が活動するわけではない。未来ビジョンを実現していく際、どう事業を展開していくか、誰にやらせるか、新たなプレイヤーが必要か、場合によってはハードや都市構造を変えなければならないのか、それらを検討する場としてプラットフォームをうまく使い、地域特有の課題について議論を深めていければよいと思う。

皆さんで未来ビジョンを作って、未来ビジョンの通りにまちづくりが進んでいるかをチェックしたり、進捗を照ら合わせたりすることができる。未来ビジョンは掲げているだけでは何も動かない。未来ビジョンを実現してくれる人は、それを実現する事業を展開してくれる人である。そのような方々が、実際に未来ビジョンに沿った形で事業を展開してくれることが理想である。

しかし、様々なプレイヤーが様々な事業を展開するような状況になると、多様な方向性が生まれ、未来ビジョンからずれた状況になることがある。なるべく未来ビジョンに近い形で事業が展開されるよう調整を担う存在が必要である。

エリアマネジメントが重要であることは認知されてきている。その活動のためには、ビジョン、実現してくれるプレイヤー、まちづくりの動きを調整するマネージャー、三者の顔ぶれが必要である。

今後、具体的な方針を確定していくためには、何をすべきか考えなければならない。活動を担えるプレイヤーの存在、どう連れてくるのか等も考え、実際に事が動く状態にしたい。それらを念頭に、エリアプラットフォームの検討に進んでいきたい。

2) まちなかエリアに関わる動き

事務局から「加茂ナイトバザール」や「加茂まちづくりフォーラム 2023」、国土交通省「マチミチ study 現地勉強会 in 加茂」について報告があった。

3) 質疑応答及び意見交換

【委員】資料の24ページが本日の会議のメインだと思うので、このページを中心に意見を述べたい。駅を利用する若者をまちなかへどのように引き込むかについては、ワーキングの中で議論があったところである。今回の資料において、若者をいかに商店街へ回遊させていくかについては、それぞれのパーツからは読み取れるが、直接的な言及がない。もし若者にフォーカスするのであれば、その辺りを「つながり」の方向性のなかで触れても良いのではないかと思う。「つながり」の方向性にぶらさがるところでは、「まち、みず、みどりの一体感の創出」、「ひと、もの、ことの好循環づくり」とある。これを一つにまとめて、「世代のつながり」や「歴史文化と日常生活のつながり」、「ハレとケ、日常と非日常のつながり」というキーワードも「つながり」の中で、表現しても良いのではないかと思う。

【事務局】おっしゃる通りで、本日の資料では細かくフォーカスしたかということ、そうではない。ご指摘の部分は、施策的なところではフォローしていく予定であるが、今回方向性をまとめるなかで、その辺りの組み込み方が甘かったと感じている。ご意見を参考にワーキンググループでブラッシュアップしていきたいと考えている。

【委員】商店街は元来職住一体であり、空き店舗があったとしても2階に居住している場合には、なかなか店舗を貸してくれない現状がある。それについては、どのように考えているか。また、商店街の空き店舗について把握しているか。

【事務局】商店街の空き店舗については実態調査を実施しており、空き店舗を貸し出すことに対してハードルが高いことも認識している。居住者と店舗入居希望者のそれぞれの動線が問題で特にトイレの問題などがあるが、賃貸可能な店舗についても調査している。一方で、動線などの物理的な要因が賃貸の障害になっているわけではなく、心理的な抵抗感のようなものもある。今後、委員からも意見をもらいながら、空き店舗の活用の問題を解決していきたい。

【委員】空き店舗はどれくらいで何割くらいが貸し出し可能なのか。もし、貸し出せる空き店舗の割合が少ない場合は、何らかのメッセージを出さないと空き店舗活用が進まないのではないか。

【事務局】手元にデータがないため、正確な数値は言えないが、すぐに貸し出しできそうな空き店舗は全体の2割程度であったと思う。

【委員】貸し出せる店舗はほとんどないのではないか。空き店舗と言っても奥には人が住んでいる。

【委員】他都市では、空き店舗の活用が進んでいる事例もあるのではないか。また、今回の資料については、よく整理されていると思う。先日、富山県射水市へ視察に行く機会があった。射水市も加茂市と共通する課題を抱えていた。そのような観点では、エリアプラットフォームの先進的な事例の中で、加茂市の人口と同規模の自治体がないだろうか。

【事務局】最初の頃は、比較的人口規模が大きな都市が多かったが、最近では人口規模が小さいエリアの取組も見られる。例えば、静岡市は人口規模が大きいですが、草薙駅周辺地区はエリア人口が1万人で国土交通省の支援制度ができる以前からエリアプラットフォームの取組を実践している。また、委員が視察された射水市は人口が12万人であり、公共施設の再編手法などを共有させてもらっている。先日の国土交通省「マチミチ study 現地勉強会 in 加茂」では須賀川市のまちづくり会社の方に講演をしていただいた。今後も他都市の事例を調査しながら、加茂市での検討を進めていきたい。

【委員】県内でのエリアプラットフォームの事例はあるのか。

【事務局】県内では新潟市と加茂市である。新潟市は今年度からエリアプラットフォームを立ち上げている。新潟市の担当者とは情報交換する予定である。

【委員】加茂市と人口規模が同程度の自治体の事例はあるのか

【事務局】現在のところない。

【委員】小京都をテーマにまちづくりをしている自治体の事例があると良い。

【事務局】空き店舗の活用について、参考となる事例の情報をもっておられる方はいらっしゃるか。

【委員】京都の例だが、現時点で成果が出ている事例はそれほどないと思う。空き家化した空き店舗の活用であれば、一棟貸しの形で取り組んでいる事例がある。住居と店舗が一体型の事例では、店舗の部分だけ賃貸できるようにセキュリティが確保できるよう区切っているのではないか。

【委員】射水市は台湾と友好都市であり、台湾の産物を売っている。加茂市は中国のツーポー市と友好都市の関係にある。中国はバブルが崩壊して厳しい状態であるが、加茂市と連携として盛り上げることができれば良いと思う。ある意味、加茂市にとってチャンスではないかと思う。中国に行ってみればわかるが、反日はなく、ウェルカムである。この25年間、ツーポー市との関係は冷めていたかもしれないが、これから交流を深めると良いのではないか。オーバーツーリズムの心配はないと思う。これからの検討において、頭の片隅にでもおいてほしい。

【委員】空き家の問題、商店街の衰退化の要因は後継者がいない、商売が儲からないことである。小売業は地域の人がお客さんであり、観光客が増えたとしても儲からない。どのように消費を喚起していくかを考えていく必要がある。結局は地域の人口を増やすことが大切である。飲食は観光で売り上げが増えるが、物販の売上を増やすには、地域の人口を増やす必要がある。

【委員】先日、ある団体の全国大会が新潟で行われ、その際に加茂市でのエクスカージョンを企画したところ、参加の応募が39人あった。雪椿染を体験してもらったところ、たいへん喜ばれ、高価な商品も買っていただいた。こうした資源があることが知られていないのだと思う。まちなかには紙漉きの体験もできる。各店舗がおもてなしをすることで、ありのままの観光を体験することができる。全国の富裕層をターゲットにすれば、加茂市でお金を使ってくれるのではないか。

【委員】委員のご指摘の通りである。観光用のコンテンツは、ちゃんとパッケージ化して見せ方を工夫すれば、消費してもらえするという証拠である。経済圏を意識しながら普段使いの商店街をどのようにしていくのか検討する必要がある。外からの人口増は難しいため、中心部に人口を寄せていくことが考えられる。市内の中で人口重心を中心部へ変えながらも、周辺への交通アクセスを改善するなどして、中心も周辺も維持することが大切である。中心部の密度を維持することで商店街を維持することにチャレンジしようとしている。

【事務局】ご指摘の人口問題は事務局としても重要な課題と思っている。

【委員】資料の24ページで、キーワードを4つにまとめていただいている。今後のワーキングで着地点を見出していくのだと思うが、今日の資料の方向性は全市民へのアプローチを意識するあまり、かなり欲張りな内容になっていると思う。これからは計画の優先順位を決めていく必要がある。加えて内需と外需、言い換えれば、まちに住んでいる人の幸せと外から来る人の話もある。これらが、ごっちゃになって議論されていると思う。また、街の人の幸せと観光まちづくりとの接点が見だせていないと思う。さらに、内需と外需とそれぞれにやり方、施策が異なるた

め、最終着地点に向けて、ハードの話、市民が主体的に取り組む話など、役割分担するなどして、整理整頓しながら考える必要がある。東京の丸の内のエリアマネジメントのようなことはできなくても、民間の力や資金を入れていく仕組みは作った方がよい。

【事務局】いただいた意見を踏まえて、優先順位と役割分担を整理していきたい。

【委員】ワーキングに参加させていただいているが、様々なアイデアが出てきており材料は出されていると思う。特に24ページ、右上の部分の内容については、会議に参加されているみなさんにとっても違和感はないと思う。今後は、「まち」、「みず」、「みどり」の最終的な方向感を議論する必要がある。特に難しいのは「まち」、商店街の方向感である。日常なのか、観光なのか。商店街のあり方がどうなるのか。また、住んでいるところにどこまで寄るのか。それによって実現の時間軸も違ってくと思う。

【委員】今日の資料くらいまでは総論賛成だと思う。しかし、これから優先順位を決める議論をする中で、他の委員がご指摘の日常の暮らしの場としての商店街の話、外からの誘客の話があり、この2つは二律背反でなく、両方やれるとは思いますが、我々のリソースに限りがある中で、どちらから手を付けるのかという議論、また、市民、商店街の皆さんにどちらを優先してメッセージを出すのかという議論があると思う。このへんは事務局でも悩ましいと思う。

【委員】時間軸を考えて、決めやすいところから決めればよいのではないか。

【委員】儲かるところからやればよい。

【委員】商店街の空き店舗問題の解決はオセロのようなもので結果の話である。色々な取組をした結果、「貸してもいいよ」という人が出てくるのではないか。その意味では、最初に着手するようなものではないと思う。

【委員】これからは正念場だと思う。事務局は大変だと思うが、現在の取組をしっかり把握する必要がある。他の委員の指摘事項に絡めれば、これからの取組について、誰がどのようにいつやるのか、長期なのか短期なのか、タイミングの目途を持つことが大切である。また、まちが活性化するためには、昼間人口を増やしていかなければならない。武蔵小杉の商店街は、開発で居住人口が増えたにも関わらず、昼間人口が少ないことから次々と閉店している。昼間人口が増えないと消費はおきない。住宅と非住宅の割合を考える必要がある。一方で、日本には年収1億円の

世帯が 150 万世帯いると言われている。彼らは国内で消費する場所が無いと言っているようだ。そうした富裕層をターゲットにしていく方向性もある。

【委員】ナイトバザールは、どんな人が来ているのか、また、可能であれば、経済効果がどれくらいなのかを分析した方が良い。

【事務局】ベッドタウンが消滅する話があり、危機感を持っている。加茂市は昼間人口が少ないことは明らかで引き続き議論していきたい。

【委員】24 ページ、加茂市の独自のキーワードとして商店街、加茂川、加茂山は理解できる。一方、周辺都市から人を呼び寄せる場合、周辺自治体と比較した中での加茂市の独自性、優位性も重要になるのではないかと。その視点では、さらに具体性を詰める議論が必要である。高齢化が進んでいるなかで経済活動を維持するのであれば、外から呼ぶ必要があり、独自性が重要になる。

【委員】加茂市には既にプレイヤーはいるという話なので、そうした方たちの意向に沿ったものをまとめると良いのではないかと。また、外から人を呼ぶということ言えば、マーケティングデータがないと外から人は来ない。工業団地の誘致の話と同じようなところがある。今日の方向性は、まだ、漠然としているので、メッセージ性を強化することが重要である。

【委員】プレイヤーが見た時に、「やろう」となるものが必要である。「令和に暮らせる商店街」はすごく難しいチャレンジだと思う。今後のワーキングにおける議論の課題である。

【委員】プレイヤーが活動していく環境を整えていくことも重要だと思う。

【委員】全国を見ても商店街が盛り上がるのは難しいことだと思う。しかし、細かく議論すると可能性が見えてくる部分もあるのではないかと。豊かなまちにするために必要な業種、不足する業種を見ていくことも重要ではないかと。そのような議論にも踏み込んでいきたい。

5 閉会

以 上